地域連携を通じた心理学教育の試み：その意義と評価

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2016-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 晃男, YAMASAKI, Teruo メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4027

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

地域連携を通じた心理学教育の試み
―その意義と評価―

学芸学部　心理学科　山崎　晃男

要旨：大阪府内の中学校と連携し、心理学科の実習科目の課題として中学校の教室環境の改善を行った。教室環境に関する生徒たちの意識について質問紙調査を実施するとともに、改善対象となった教室を見学し、改善策について検討していった。先行研究のレビューを行い心理学的知見を踏まえつつ、照明、収納棚、黒板周りなどに関する改善策を策定・実施した上で、再度、質問紙調査を実施して生徒たちに改善策への評価を求めた結果、いくつかの点について改善の効果が示唆された。教室環境の改善が終了した後、本連携事業について学生と中学校教員に評価を求めた。その結果、学生は実践的な心理学教育として授業を評価していた。一方、中学校教員は大学との連携に期待感を抱きながらも、本事業についての情報不足などの理由から事業の意義について肯定的な評価を控える傾向が示唆された。

キーワード：地域連携、大学生、心理学教育、教室環境、中学校

1. はじめに

大阪樟蔭女子大学では、平成 26 年度にくすのき地域協創センターを立ち上げるなど、近年、地域との連携に力を入れている。心理学科としても、学科内の様々なリソースを利用して地域の発展に寄与するとともに、そのことを通じて学生教育や研究を発展させるという、互恵的な地域連携を目指した活動を行っている。大阪府内の T 中学校との連携事業もその一環として実施され、T 中学校の一つの教室をフィールドとして教室環境の改善を行った。

本稿ではまず、この連携事業の概要について述べた後、事業の詳細とそこで目標とされた教室環境改善に関する成果について説明する。それに続いて、本事業を学生教育および地域協働という観点から見たときどのように評価されるかについて、活動終了後の学生へのアンケートと T 中学校教員へのアンケートに基づき検討する。

2. 連携事業の概要

本連携事業は、T 中学校との連携の下、心理学科の 3 回生対象の選択科目である「心理学研究法応用実習 A」の課題として教室環境の改善を図ることを目的として実施された。本授業の受講生は 3 回生 11 名であった。平成 27 年 4 月より授業担当教員と T 中学校との間で打ち合わせを開始し、5 月後半より「教室環境の改善」というテーマの下、授業内で検討を進めていった。5 月 22 日（金）に学生が初めて現地を訪れ、校長および連携担当教員から説明を受けるとともに、教室の見学を行った。また、5 月 25 日から 1 週間程度の期間に、1 年生から 3 年生までの各学年 1 クラスを選び、教室環境に関する質問紙調査を実施した。その後、6 月 26 日に改善を行うクラスに対して再度の見学を行いつつ、授業内での検討を経て、7 月 11 日に現地にて実際の改善作業を実施した。また、7 月 14 日から 16 日にかけて朝の読書の時間に改善策の効果を検証する実験をクラス担当教員の協力の下で実施すると同時に、11 日に行った改善について、クラス生徒に対する質問紙調査も実施した。

以下、教室環境に関する質問紙調査、改善作業の実施および検証実験について報告する。

3. 教室環境に関する質問紙調査

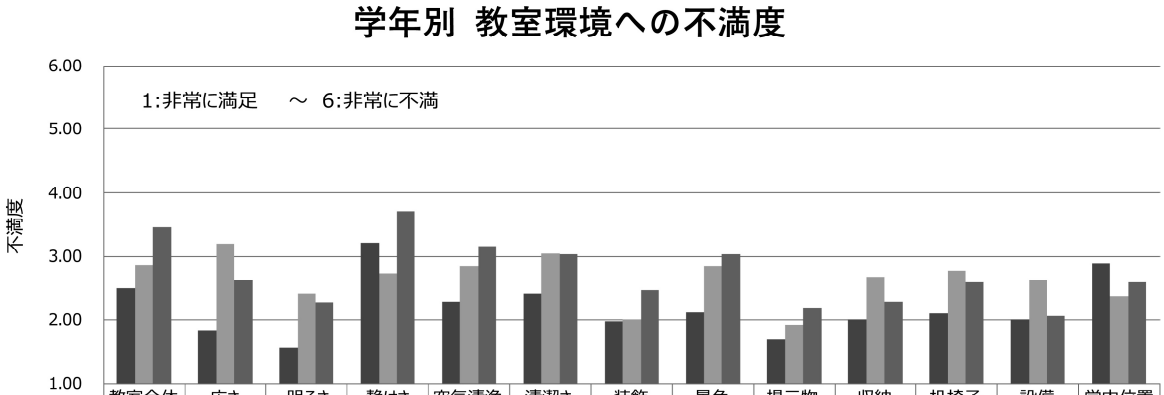
3-1. 目的

生徒たちが教室環境に関して現状でどのような不満を抱いているのかを調べるため、1 年生から 3 年生までの各学年 1 クラスずつを選び、教室環境の様々な点について質問紙調査を実施した。

3-2. 方法

回答者

1 年生 37 名（男 17 名、女 19 名、不明 1 名）、2 年生 40 名（男 22 名、女 18 名）、3 年生 32 名（男 16 名、



	教室全体	広さ	明るさ	静けさ	空気清浄	清潔さ	装飾	景色	掲示物	収納	机椅子	設備	学内位置
■1年生 平均	2.50	1.83	1.56	3.22	2.29	2.43	1.97	2.11	1.70	2.00	2.11	2.00	2.89
■2年生 平均	2.86	3.21	2.43	2.74	2.85	3.05	2.00	2.85	1.93	2.69	2.79	2.65	2.38
■3年生 平均	3.46	2.65	2.29	3.71	3.16	3.03	2.48	3.03	2.20	2.30	2.60	2.07	2.60

図1　学年別の教室環境全体および各要素に対する不満度

女 15 名、不明 1 名）

実施時期と配布方法

5 月 25 日から 1 週間程度の期間に、各クラス担当教員に依頼して実施していただいた。

質問紙

質問は、教室全体に対する満足度を問うもの 1 問と、教室の各要素（広さ、明るさ、静けさなど）に対する満足度を問うもの 12 問、現在教室で勉強をするにあたって困っていることを問うもの 1 問、教室をより良くするためのアイデアを問うもの 1 問の計 15 問であった。満足度を問う質問では、「1：非常に満足」から「6：非常に不満」までの 6 段階の数字で答えてもらうとともに、不満な場合、その理由を自由記述で記載してもらった。「困っていること」「より良くするアイデア」の質問は、自由記述で記載してもらった。回答は無記名で行われた。

3-3. 結果

図 1 に学年別にみた教室環境全体および各要素に対する満足度の平均値を示す。数値は大きいほど不満度が高いことを示すので、図中および図のタイトルでは不満度と表記した。

教室全体については、各学年とも「満足でも不満でもない」という 3.5 点を下回っているが、学年が進むにつれて不満度が上昇している。ただし、選択肢の頻度では、3 年生でも 1 から 3 までの「やや満足」以上を選んだ者が 16 名に対し、4 から 6 までの「やや不満」以上を選んだ者が 12 名で、「満足」を選んだ者の方が多かった。

不満な理由については各学年（クラス）によってかなり異なっていた。1 年生では理由をあげた 4 名のうち「授業中うるさい」という不満が 3 名であった。2 年生では理由をあげた 10 名のうち「床が滑らない」という不満が 6 名、「床が汚い」という不満が 3 名と、床に関する不満が多かった。3 年生では、理由をあげた 12 名のうち 10 名が暑さに関する不満であった。

個々の要素については、平均値は多くの項目で「やや満足」以上を示したが、2 年生の「広さ」、1・3 年生の「静けさ」で 3 点を若干上回っているのが目立つ。2 年生の「広さ」に関して、回答した 39 名中 14 名が「狭い」「机と机の間が狭い」といった記載をしていた。1 年生は「静けさ」について、36 名中 8 名が「うるさい」という記述をしていた。そのうち 3 名は授業中にうるさいと明記しており、ここでのうるささは生徒によるものだと考えられる。一方、3 年生は 31 名中 13 名が自由記述に書き込んでいたが、そのうち 11 名は隣の工場がうるさいと訴えていた。

以上のように、全体的には教室環境への不満はそれほど強くないものの、いくつかの具体的な点に関して不満を訴える声もあり、何に不満があるかはクラスごとに異なっている様子が見られた。

4. 教室環境の改善

4-1. 目的

担任教員の了承を得て、1 つの教室環境の改善に、「心理学研究法応用実習 A」を受講する学生 11 名とともに取り組んだ。改善の第一の目標は学習を促す教室環境の構成であり、第二の目標として教室のアメニティの向上を目指した。

4-2. 方法

2015年5月22日（金）の11時半から12時と6月26日（金）の11時から12時に実際に授業を行っている教室を見学させていただくとともに、3.で述べた質問紙の回答を参考にしながら、改善策について協議を行った。

5回の授業内での協議を経て、以下の4つの改善策と1つの検証実験を実施することとなった。

4つの改善策については、7月11日（土）に学生とともに教室に伺い、T中学校の協力を得つつ、9時から12時の3時間で計画に従った改善を行った。

改善実施後、数日間、生徒にその環境で授業を受けてもらった後、改善についての質問紙調査を行った。

検証実験については、使用する音刺激と質問紙をお渡しし、クラス担任教員によって7月14日（火）から16日（木）の朝の読書の時間に実施していただいた。

4-3. 改善策と検証実験

以下に、各改善策と検証実験の中身について説明する。改善を行った結果および検証実験の結果については、後日実施した質問紙調査によって評価したが、それについては次節でまとめて述べる。ただし、改善策のうち机の配置の改善については、質問紙で取り上げなかったため、改善内容の説明にとどめる。

(1) 照明の改善

環境における明るさの要因は、そこで行われる作業に影響を与えることが知られている。一般的には、認知的な課題（読書や勉強など）を行う場面では照度や色温度が高い方が評価が高いという知見が得られている。また、色温度が高い方が集中しやすいという結果もある。

こうした知見から、教室内の照明の色温度を高くすることで集中力を向上させるという改善策を提案した。

実際の教室では、入手しやすく色温度の高い蛍光灯（三菱、FLR40SDM36）が既に使われていたが、教室内の6本の蛍光灯がそれとは異なるものであったので、その6本のみを上記蛍光灯に変え、全体的な色温度の統一を図った。

(2) 後部収納棚の改善

生徒の個人的な荷物を置く場所として教室後部に収納棚が設けられ、1つのスペースを3人で使用するようになっている。教室見学時に、このスペースが必ずしも有効に利用されていないように思われた。たとえば、鞄を乱雑に置いているために3人同時に使うことができず、机の横に鞄をかけている者がいるといった状況が観察された。

そこで、収納棚に各人の占有部分を示すためにテーピングを施し、スペースの有効利用を図るという改善策を提案した。

(3) 黒板周りの改善

心理学に「注意資源」という概念がある。人間が認知的な課題を遂行する際にはその課題に一定の注意を向けなければならないが、人間が一度に向けることができる注意の総量には限界がある。こうした注意の総量を心的な資源として概念化したのが、注意資源という考え方である。注意資源は人ごとに基本的に一定であると考えられている。したがって、ある課題を行っているときに、別の課題や対象に注意が向けられると、その分、元の課題に向けることのできる注意量が減ってしまい、課題遂行に悪影響を及ぼすことになる。

教室見学時に、前の黒板周りに生徒の注意を惹く多くのものが設置されていることが観察された。時計、テレビ、様々な掲示物、ファイルなどである。これらの配置物が生徒の注意を消費することで、本来授業に向けられるべき注意が損なわれることを防ぐために、黒板周りのものを生徒の目に触れない教室後部に移動させるという改善策が提案された。

一方、注意資源を消費し続けることは疲労をもたらすが、樹木のような自然物を見ることが疲労の回復に効果があるという知見がある。そこで、黒板周りの人工的な配置物を極力排すると同時に、黒板の左右に観賞用の植物を配置することにした。

(4) 机の配置の改善

机の配置についても、質問紙調査で訴えの多かった狭さの解消という観点から、改善策が提案された。どの位置の生徒も机周りにほぼ同じスペースを持てるよう机の間隔を決定し、床にテーピングを施して机の位置を示すことにした。また、スペースの有効利用とともに、黒板への視認性を向上させるため、教室前部の左右に位置するいくつかの机は黒板中央に向けて斜めに配置することにした。

(5) 集中力に及ぼす背景音の効果についての検証実験

目的

背景音を流すことが読書への集中力に及ぼす効果を

検討することが、本検証実験の目的である。

店舗や公共空間、居室などで背景音楽（BGM）を利用することは多々あるが、ここではBGMだけではなく自然音などの効果音を含めて、鑑賞のような意識的聴取を目的とするのではないが意図的にその場に流される音を背景音と呼んでいる。読書や計算、その他様々な問題解決のような認知課題遂行時にBGMを流すことの効果については、これまで多くの研究が行われている。そこでは、BGMが認知課題遂行に及ぼす効果として、主に3つのものが考えられている。その1つは、BGMが感情状態、特に覚醒レベルに及ぼす効果である。BGMによって覚醒レベルが上昇することが、認知課題遂行を促進するというものである。2つ目の効果として、背景雑音に対するマスキングがあげられる。BGMによって、認知課題遂行の妨げとなるような背景雑音をマスキングすることによる効果である。3つ目は、テンポの効果である。BGMのテンポに対する引き込みが生じ、認知課題遂行の速度に影響することが考えられている。

一方、市販CDやインターネットなどでは、BGMだけではなく波音や鳥の声などの自然音も、学習時に流す音として広く流通している。それらを踏まえ、本検証実験では、自然音による演出音も対象とし、主として覚醒レベルへの影響およびマスキングを通じて背景音が読書時の集中力に効果を及ぼすかどうかを検討することとした。

方法

刺激

背景音1としてyoutubeからダウンロードした「波音と鳥の声の音」、背景音2として「パッヘルベルのカノン」を選び、それぞれ5分に編集してCDに録音した。

手続き

朝の読書の時間を使い、第1日目には背景音なしで、第2日目には背景音1を流し、第3日目には背景音2を流して読書をしてもらい、その後、質問紙に記入をしてもらった。

質問紙は、読書の時間中の集中度について問う項目が1つと、「憂うつ」「落ち着かない」「心地よい」と言った背景音聴取時の気分を問う項目が10、さらに読書時の感想についての自由記述からなっていた。また、第3日目には、3日間のどの状態が一番良かったかを問うた。

4-4. 結果

(1) 照明の改善

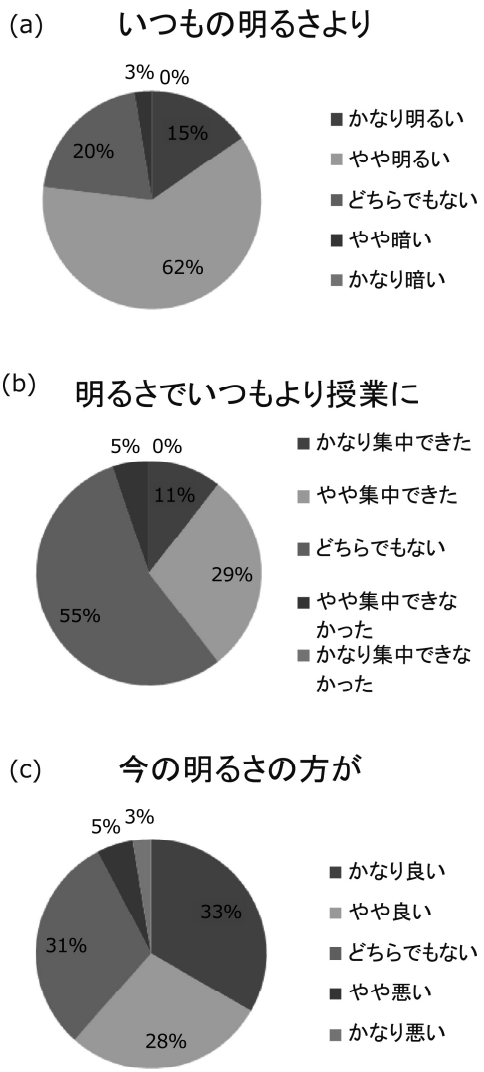


図2　照明の改善の効果

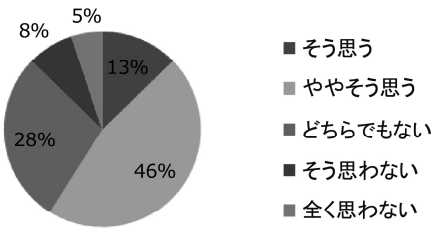
照明を変えた結果について、質問紙で生徒に7項目にわたって問うた。そのうち、主な3項目についての結果を図2に示す。

照明を変えたことにより、8割弱の生徒がいつもより明るくなったと感じ、結果として今の明るさの方が良いと6割強の生徒が答えている。学習への効果として、4割の生徒がいつもより授業に集中できたと答えているのに対し、いつもより授業に集中できなかったと答えた生徒は5％と少数であり、生徒の主観として照明の変化はよい結果をもたらしたように思われる。

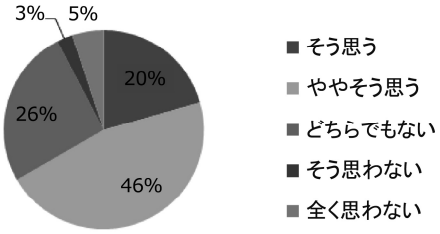
(2) 後部収納棚の改善

後部収納棚に仕切りのテープを貼ったことについて尋ねた3つの質問への回答結果を図3に示す。

(a) 後部収納スペースは以前より良くなったか



(b) ごちゃっとした感じはなくなったか



(c) この状態をキープできるか

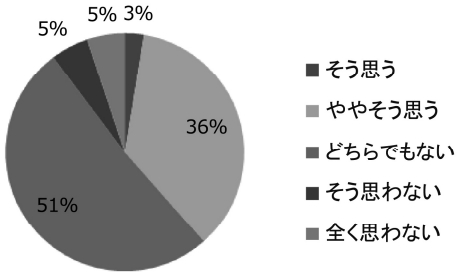


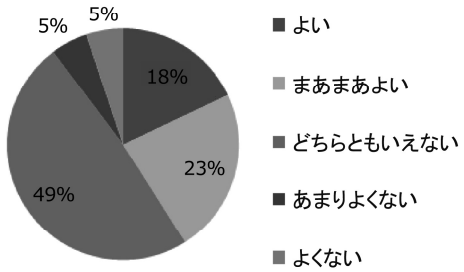
図 3　後部収納棚の改善の結果

後部収納棚に個人ごとに仕切りのテープを貼ったことによって、「ごちゃっとした感じ」がなくなったと感じている生徒が 7 割弱おり、6 割弱の生徒が以前より良くなったと感じている。このことから、後部収納棚の改善は、生徒の主観として教室のアメニティを良くする効果があったことが示唆される。ただし、この状態をそのままキープできると感じている生徒は 4 割弱、キープできないと感じている生徒は 1 割なのに対し、どちらでもないと答えた者が 5 割であり、今後についての不安も感じられる。

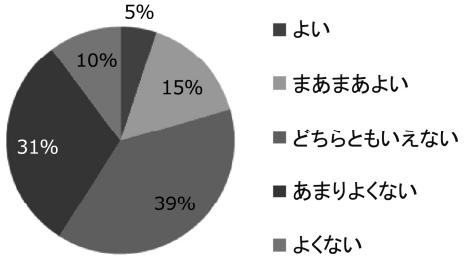
(3) 黒板周りの改善

今回の改善では、黒板周りから掲示物や時計など授業に直接必要ではないものを極力なくすとともに、左右に観葉植物を配した。これらに対して、4 つの質問で生徒に問うた結果を図 4 に示す。

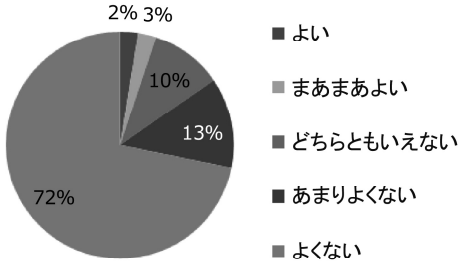
(a) 黒板周り全体の環境



(b) 前に掲示物がないこと



(c) 前に時計がないこと



(d) 以前より集中できたか

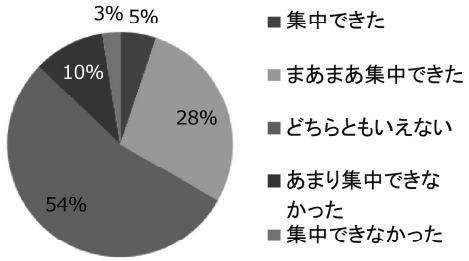


図 4　黒板周りの改善の結果

黒板周り全体の環境については、肯定的に捉えた者が 4 割強であるのに対し、否定的に捉えた者は 1 割、肯定否定どちらでもない者が約 5 割であり、全体的には肯定的な評価が多かった。また、以前よりも黒板に集中できたかを問うと、3 割強の生徒が以前よりも集中できたと答えたのに対し、集中できなかったと答えたのは 1 割強と少数であった。

一方、前の掲示物を極力減らしたことについては、4割の生徒が否定的に捉え、肯定的に捉えた者は2割であった。さらに、前の時計を後ろに移動させたことについては、85%と大多数の者がよくないと感じ、よいと答えた者は5%に過ぎなかった。

これらの結果から、黒板周りに施した変更、特に時計の移動が、生徒にとっての快適性を損ねるという否定的な影響をもたらした一方、授業への集中を高めるという当初の目的も果たしていることが伺われる。この改善が生徒の学習にどのような効果を及ぼすかは、より長い期間を通じた検証が必要であろう。

(5) 検証実験の結果

背景音の条件別に、どの程度読書に集中できたかを自己申告した数値を平均したものを図5に示す。平均値で見ると、背景音がない条件で最も集中できたと答えているが、条件間の差は僅かである。一方、どの状態が最も良かったかを問うた時には、パッヘルベルのカノンが流れていた状態を選んだ生徒が半数弱と最も多かった（図6)。

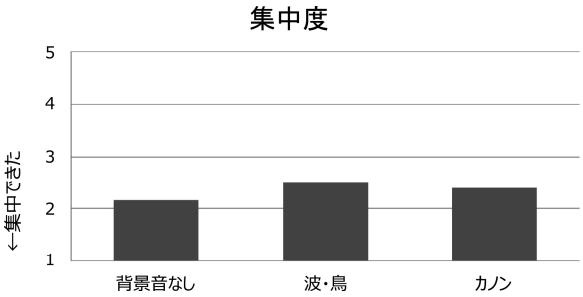


図5　条件ごとの集中度の回答

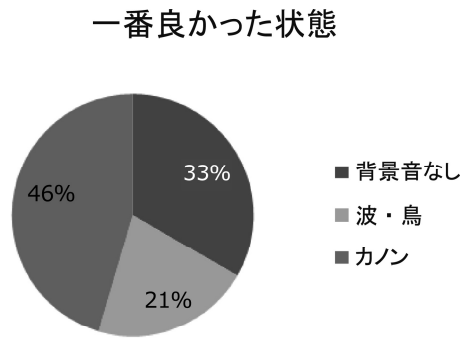


図6　条件ごとの「一番良かった状態」選択率

この結果からは、環境としてのアメニティは音楽を流すことにより上昇するが、学習に影響する重要な要因である集中度については背景音の自覚的な効果は見られないということになる。ただし、自覚的な集中度が高いことが学習の促進にそのまま結びつくかどうかについては、別途検証する必要がある。また、学習への効果を見るためには1回だけの実験ではなく持続的な状態での検証も必要であろう。

背景音聴取時の気分についての回答を因子分析にかけたところ、「心地よさ」「憂うつさ」「眠気」という3つの因子が抽出されたが、2つの背景音の間で因子得点に違いは見られなかった。すなわち、どちらの背景音を聴いても、その際の気分には特に大きな違いは生じていなかったので、本稿ではその詳細は省くこととする。

5. 教室環境改善についてのまとめ

以上、述べてきたように、本連携事業では、全学年1クラスずつを対象とした教室環境に関する質問紙調査、1クラスを対象とした教室環境改善案の策定・実施とその結果についての質問紙調査、教室環境改善に向けた検証実験、を実施した。

5-1. 教室環境に関する質問紙調査

教室環境に関する質問紙調査では、教室全体および教室の各要素について、「1：非常に満足」から「6：非常に不満」までの6段階で不満度を評定してもらった。教室全体については、各学年とも「満足でも不満でもない」という3.5点を下回っていた。選択肢の頻度でみても、3の「やや満足」以上を選んだ者の比率は、1年生で89%、2年生で78%、3年生で57%と、最も低い3年生でも半分を上回っており、全体的には教室環境に関する不満は大きくないと考えられる。ただし、個々の要素について自由記述の意見も含めてみていくと、1年生では「授業中に他の生徒がうるさい」、2年生では「床が滑らない」「教室が狭い」、3年生では「暑い」「隣の工場がうるさい」といった不満があげられ、クラスごとに様相が異なっていた。

5-2. 教室環境改善案の策定・実施とその結果

改善案としては、以下の4つが提案された。

(1) 照明の改善
(2) 後部収納棚の改善
(3) 黒板周りの改善
(4) 机の配置の改善

(1) 照明の改善

これまでに得られている知見に基づき、照明の色温度を高くすることによって集中度をあげることを目的として、教室の蛍光灯の入れ替えを行った。結果として、8割弱の生徒がいつもより明るくなったと感じ、

4割の生徒がいつもより授業に集中できたと答えた。いつもより授業に集中できなかったと答えた生徒は5％と少数であり、この改善策はよい結果をもたらしたように思われる。

(2) 後部収納棚の改善

教室内のスペースの有効利用を図るために、後部収納棚にテーピングを施し、各人の使用スペースを明示するという改善を行った。その後の質問紙調査で、「ごちゃっとした感じ」がなくなったと答えた生徒が7割弱おり、6割弱の生徒が以前より良くなったと答えている。このことから、この改善策も教室のアメニティを良くする効果があったと考えられる。

(3) 黒板周りの改善

授業への集中と疲労への配慮という観点から、黒板周りの配置物を極力少なくするとともに、黒板の左右に観葉植物を置くという改善を行った。その結果について、黒板周り全体の環境に関しては、肯定的に捉えた者が4割強であるのに対し、否定的に捉えた者は1割であり、全体的には肯定的な評価が多かった。また、3割強の生徒が以前よりも集中できたと答えたのに対し、集中できなかったと答えたのは1割強と少数であり、目的である授業への集中については、一定の効果が得られたと考えられる。一方、前の掲示物を極力減らしたことについては、4割の生徒が否定的に捉え、肯定的に捉えた者は2割であった。さらに、前の時計を後ろに移動させたことについては、85％と大多数の者がよくないと感じ、よいと答えた者は5％に過ぎなかった。したがって、この改善策は教室のアメニティという観点からは否定的な影響をもたらしたと言える。

(4) 机の配置の改善

質問紙調査で訴えの多かった狭さの解消という観点から、どの生徒も机周りにほぼ同じスペースを持てるよう机の間隔を決定し、床にテーピングを施して机の位置を示すことにした。また、スペースの有効利用とともに、黒板への視認性を向上させるため、教室前部の左右に位置するいくつかの机は黒板中央に向けて斜めに配置することにした。ただし、質問紙調査にはこの改善に関する項目が含まれなかったため、効果についてはここで述べることができない。

以上、机の配置を除く3つの改善策について、生徒の主観的評価としては多少なりとも教室環境の向上をもたらしたと感じられているものが多かった。ただし、本来の改善目的である学習の向上については、集中度があがったという主観的評価が得られたものもあるが、実際の学習向上につながったかどうかは学力テストの成績など、別の客観的な指標に基づいて評価する必要がある。また、質問紙調査は改善策実施から1週間程度の時期に行われた。改善の効果を評価するためには、中長期的な評価も求められる。さらに、今回の黒板周りの改善は、集中度の向上とアメニティの低下という相反する結果をもたらした。集中度の向上が学習向上に結び付くか、今回の効果が中長期的にどう変化するか、という問題とともに、このようなジレンマが生じたときにどうするかという点も、今後の問題となろう。

5-3. 教室環境改善に向けた検証実験

教室環境についての質問紙調査で、外部の騒音に対する不満があげられたこともあり、背景音を流すことによって騒音を低減し集中を促すことができるかどうかを検証するために実験を行った。朝の読書の時間を使って、自然音（波音と鳥の声）または静かなクラシック音楽（パッヘルベルのカノン）を背景音として流し、背景音を流さない条件と比較した。読書への集中度やどの条件が好ましいかを尋ねたところ、平均値では背景音がない条件で最も集中できていたが、条件間の差は僅かであった。一方、どの状態が最も良かったかを問うた時には、静かなクラシック音楽が流れていた状態を選んだ生徒が半数弱と最も多かった。この結果からは、環境としてのアメニティは音楽を流すことにより上昇するが、学習に影響する重要な要因である集中度については背景音の自覚的な効果は見られないと考えられる。

自由記述では背景音に対する反応に大きな個人差があることも見て取れ、背景音の利用については慎重に検討していく必要がある。

6. 本連携事業の評価

これまで述べたように、教室環境改善を目指した本活動では、一定の成果が得られたと考えられる。一方、本活動を地域協働および学生教育という観点から捉えた場合、どのように評価されるであろうか。この点について、受講学生による評価および中学校教員による評価を見てみる。

6-1. 学生による評価

教室の改善を実施した後、授業内においてこの授業

が「面白かったか」「心理学を学ぶ上で役に立ったか」「将来、社会で心理学を活用するために役立つと思うか」について1から4の数字を選ぶ形で評定してもらった（1：肯定的、2：やや肯定的、3：やや否定的、4：否定的）。回答は無記名であった。

その結果、回答した9名全員が面白さについて2を選び、「心理学を学ぶ上で役に立ったか」については1と3を選んだ者が各1名で残り7名は2を選び、「将来、社会で心理学を活用するために役立つと思うか」については2名が1を、残り7名が2を選んだ。これらの結果からは、心理学を実践的に活用する方法を学ぶ場として、学生がこの授業を肯定的に評価していると言えよう。

同時に自由記述で尋ねた授業への評価においても、「与えられた課題に対し、自分で調べた根拠に基づいて改善点を提案し、実行することが大変であった」「先行研究を調べ、それらを応用して実践に結びつけることで、考える力が身についた」といった肯定的な意見が多く、内容そのものに対する批判はほとんど見られなかった。

一方、T中学校との連携の話し合いを始めた時点では既に授業が開始しており、授業当初の数回は連携事業とは直接関係のない内容で進めることとなった。その結果、教室環境の改善に向けた取り組みに十分な時間を確保できたとは言い難い。この点については、学生からも時間不足を指摘する意見があげられていた。

6-2. 中学校教員による評価

本連携事業では、学生による2回の授業見学と1回の改善実践を行った。それらの終了後、T中学校教員に対して、無記名で、連携事業に対するアンケートを行い、15名の回答を得た。

連携事業が行われていることを知っていたかを問う質問では、15名中9名が少なくとも大まかな内容を知っており、5名が内容は知らないが行っていることは知っていると答えた。連携事業に対する評価では、15名中4名が「大いに」もしくは「まあ」評価できると答えたのに対し、2名が「あまり評価できない」と答えた。9名は「わからない」との回答だった。今後、このような事業を行うことについてどう考えるかを問う質問に対して、9名が「是々非々で行っていくべき」と答え、2名が「積極的に行うべき」、1名が「あまり行っていくべきではない」との回答だった。残りの1名は「わからない」であった。

これらの結果から、連携事業を行っていること自体はある程度知られているが、その内容について詳しく知っているというほどではなく、そのためどのように評価すべきか「わからない」という者が多かったように思われる。その結果として、今後についても「是々非々」という回答が多くなったのであろう。今後は、中学校の一部をフィールドとする事業であっても、中学校全体に事業内容を伝えていく必要がある。

自由記述で大学と連携事業を行うことのメリットとデメリットを問うた質問に対しては、15名中9名の回答者から、専門的な知識や多角的な視点、外部の目などによる新しい気づきの可能性を期待するという意見が得られた。また、生徒が大学の姿を身近に見ることで進路指導的な効果があるという意見もあった。

他方、デメリットとして、中学校の実態を知らない外部の者が踏み込むことで現場が混乱するという意見もあった。特に、中学校という教育現場にはふさわしくない服装、態度が目についたという意見が5名の回答者から寄せられた。この点については、今後、連携先とのより綿密な打ち合わせを行った上で、十分な配慮のもとで事業を実施していく必要がある。

6-3. 連携事業としての評価のまとめ

上述の学生による評価と中学校教員による評価を踏まえながら、本連携事業を心理学の学生教育および地域と大学の協働活動としてどのように評価できるか、以下に簡単にまとめる。

本連携事業を心理学教育として捉えた場合、従来の授業では実現が困難であった、心理学的知見を現場での課題解決に応用することによる実践的な学びの場を提供するという意味で、非常に意義があると考えられる。その点は、学生自身による評価においても指摘されていた。

一方、現場で課題解決を図るためには、問題の発見、定式化、関連する先行研究の検討、先行研究を踏まえた心理学的根拠に基づく解決策の策定、解決策の実践という一連の作業が必要であり、それ相応の時間を確保しなければならない。今回の活動では、既に述べたように、授業開始前までに連携先と十分な打ち合わせを行うことができなかったため、時間の確保という点で問題が残った。ただ、そもそも教室環境の改善といったテーマは、改善の試みを1回行ってその直後に質問紙調査でその効果を検証すればよいというものではなく、中長期的な検証や改善の継続が必要である。その意味では、「心理学研究法応用実習A」という単独の授業の枠組みだけではそうした中長期的な取り組みは

難しいため、連携事業を行うための枠組みの拡充または転換を図っていく必要もあるだろう。

協働活動として考えた場合、連携担当者間での打ち合わせに加えて、連携先全体に連携事業をどれだけ理解してもらうかが重要であるが、その点でも今回の事業は不十分であり、そのことが中学校教員による評価でどのように評価すればよいか「わからない」との回答が多数出る結果につながったのであろう。ただ、大学との連携については肯定的な意見も多くあり、連携先の期待に応えるような課題解決の成果を上げ、そのことをしっかりと連携先に伝えることで、連携事業を盛んにしていくことは可能であると思われる。そのために、連携先との綿密な打ち合わせが必要であり、今回のように学生の服装や態度の点で不興を買うような事態は避けるようにしなければならない。

7. まとめ

大阪府内 T 中学校との連携により、大阪樟蔭女子大学学芸学部心理学科の専攻科目である「心理学研究法応用実習 A」での心理学学習の課題として、中学校の教室環境の改善に取り組んだ。このような課題解決型の学習は今後、大学においてもますます重視されていくと思われるが、課題を実際の現場に見出し解決していくというきわめて実践的な学習が可能であることが、地域連携事業として授業を展開する大きな利点であろう。今回、取り組んだ期間に得られた成果はささやかなものではあるが、いくつかの指標において教室環境改善を示唆する結果が得られ、実践的な心理学教育として意義があったと考える。しかしながら、より実践的な観点からは、教室環境の改善が本来の目的である学習の向上に結びつくかどうかを検証する必要があり、そのためには中長期的な取り組みが必要となる。そうした連携の枠組みをどのように実現していくかが今後の課題である。

地域との連携事業を継続していくためには、大学側が地域の実情を深く理解するとともに、地域に大学のリソースや連携の意義、その成果などについてより広く知ってもらう必要もある。今回の連携事業では、大学側の中学校の実情への理解や、担当者以外の中学校教員への事業内容についての情報発信などの点で不十分な点が多々あった。

以上、本連携事業では一定の成果とともに様々な問題点が浮かび上がってきた。今後、地域との連携事業を進めていくうえで、これらの課題に取り組んでいきたいと考える。

謝辞

本事業をご理解いただき、ご協力賜りました中学校の校長先生と連携担当者、および関係各位に感謝申し上げます。本研究は、大阪樟蔭女子大学平成 27 年度くすのき研究助成プログラム学校支援領域の助成を受けています。